



「草木奇品家雅見 卷之下七丁裏」は、「仏桑花 (グツウゲ)」(ハイビスカス)と「たちばな」である。

増田繁亭金太郎が「草木奇品家雅見」を著した文政年間、「仏桑花（ブツウゲ）」は遠く琉球の国から運ばれて来たものである。運んで来るだけでも大層なことであるが、冬を越したというのも驚きである。

当時は、「唐室（とうむろ）」という萱や稲わらで造った今日の温室のような保温用具を考案し、さらに根を稲わらで包んでやや高いところから吊るし、地表の冷氣から遠ざけて冬の寒さを凌いだ。

現代の我が家では、一晩中室内を暖房して冬でも花を咲かせているが、経験上 10℃以下では枯れるので、江戸時代に冬を越したのは信じられない思いである。

「草木奇品家雅見」の「仏桑花（ブツウゲ）」は、駒込うつきやしき長左エ門の手に成るもので「花の斑入りのまわりが見事だ」としている。

一方、「たちばな」は駒込白山前利兵衛の手に成るもので、黄色の実をつけ、斑入りの葉は「鳳凰」のようだとしている。「松平斑」とは、どこかの松平公を指すのだろうか。また、鉢の「肴屋黄金」と言うのも判然としない。

「たちばな」は台木に接木してあるが、この場合、接木された穂木の斑入りの遺伝子は保たれるので、これにより奇品が育種されていくことになる。(2008.2.5)

Copyright (C)2008 増田信敬 (masuda.nobutaka) All rights reserved

{ [HYPERLINK "http://soumokukihinkagami.com/"](http://soumokukihinkagami.com/) }